日本古典集成

浮世床　四十八癖

本田康雄　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第五二回）
浮世床　四十八癖

昭和五十七年七月五日　印刷
昭和五十七年七月十日　発行

校注者　本田康雄
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

定価二二〇〇円

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasuo Honda, Printed in Japan, 1982.

目次

凡例……三
浮世床……一
四十八癖……一八九
解説　暮しを写す―式亭三馬の文芸―……三八七
付録
三馬店図……四一九
三馬店を中心とした日本橋周辺地図……四二〇
日本橋本銀町長屋図……四二三
式亭三馬年表……四二四
『浮世床』『四十八癖』金銭・物価等対照索引……四三三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

凡　例

本書は、式亭三馬の滑稽本から、庶民の日常生活を描写した傑作として、『浮世床』『四十八癖』の二作品を選んだ。

〔本　文〕

一、『浮世床』は、吉田幸一氏蔵本を底本とし、ほかに同氏所蔵の初版本と判断される別本（初編）を参照させて戴いた。『四十八癖』は、国立国会図書館蔵本を底本とし、尾崎久弥コレクション（蓬左文庫）蔵本および校注者架蔵の零本を参照した。

一、常用漢字は新字体を、それ以外は正字体を用いた。異体字、俗字は通行字に改めることを原則とした。

一、かなの字体は、現行の平仮名・片仮名の字体に統一した。

一、仮名づかいは、原則として歴史的仮名づかいに準拠する方針を採った。発音を表すために工夫された表記、また作者の三馬自身に当時通用の仮名づかいについての軌範意識（参考）があって表記されたと考えられるものは生かした。

（参考）「仮字例」　○申を「もうす」訓　興立を「こうりう」音　と書ける類すべて婦女子の読易きを要とすれ

ば音訓ともに仮字つかひを正さず」（『浮世風呂』三編巻頭）。

一、序文は底本通りに表記した。

一、用言の送り仮名は、活用語尾を送った。

一、句読点は底本の区切りを参考にして校注者が付した。

一、ト書き形式の割注は底本表記に従ったが、その振り仮名は省いた。

一、原注のうち、右注は底本通り、左注は該当語の下に割注の形で入れた。

一、会話や心中思惟の語は括弧で括ったが、ト書きにかかる会話の受け括弧はつけていない。

一、底本中の会話文は初出に話者名と話者記号を付し、再出以降は記号のみの場合がある。これは底本のままとした。また話者名や話者記号等に誤脱がある場合は、頭注で断ってある。

一、底本の振り仮名は総ルビに近い形であるが、なるべく省略し、見開き二頁にわたって初出の語だけに付した。

一、『浮世床』は演劇における「場」にあたるようなまとまった場面をつないで構成されている。その場面を一段落として改行した。『四十八癖』は各話を一段落とした。

一、その他の表記

A　原文の片仮名小文字の表記は、これを生かした。

B　仮名の踊り字「ゝ」「〳〵」、漢字の踊り字「々」「々々」は底本の表記を生かした。ただし、振り仮名中の踊り字は用いなかった。

C　指示代名詞はなるべく仮名書きにした。ただし、特殊なものについては底本を生かした。

D　小書きで表記されている感嘆詞、終助詞、擬声語の類は、底本がわかち書きの場合もわかち書きにしなかった。

E　本文中の絵文字は底本を生かした。

F　本文読解のために必要と考えられる印章、絵印、図版の類はこれを生かした。また、この類を読者の便を考えて必要によって活字に読みかえたところもある。

〔挿　画〕

一、『浮世床』の口絵は、底本に従って掲載した。ただし、口絵中にある会話文字は活字化して句読点を加え口絵下に添えた。

一、『四十八癖』の挿画は、各話ごとに代表的な一葉を選び掲載することを原則としたが、一部省略したところもある。

〔傍　注〕

一、色刷りの傍注は読者の理解をたすけるためにつけた口語訳である。可能な限り本文と対応するようにつとめた。

一、本文に省略されている語句を補う際には〔　〕で、同じく話者を指示する場合には（　）で括って示した。

〔頭　注〕

一、近世後期の庶民生活とその風俗等を、適宜解説するようにつとめた。

一、引用文は原文のままを原則としたが、読みやすさを考えて、漢文を訓み下しの形に改め、句読点などの補いをしたところがある。なお引用文の出典書名の振り仮名は現代仮名づかいになっている。

一、本来、傍注で処理すべき口語訳を、頭注欄に移したところがある。

一、＊印は主に本文の鑑賞、批評のために用いた。

一、割注部分の語句についての注は、本文割注の各行頭に一つの注番号を付け、該当語句を〔　〕に入れて掲出した。

一、『浮世床』は段落ごと、あるいは会話の主題の転換ごとに内容を要約した小見出し（色刷り）を付け、『四十八癖』は各編に含まれている各話を一つの段落とし、原則として小見出しを付けた。

一、『浮世床』の口絵頭注欄には◇を使った。当時の大長屋の景を写す、近世後期の貴重な風俗史料であるので、読解のためにできるかぎりの説明を加えたつもりである。

〔解　説〕

一、三馬の「俗談平話」の文芸――それを通して庶民生活を活写しようとした創作の意図と、その卓抜した描写技術の成立の過程を明らかにするようつとめた。

〔付　録〕

一、本書両作品に共通する主要な舞台である、江戸後期の長屋についての理解の便を図るための資料として、必要と考えられる図版を掲げた。また、併せて初期の職業作家としての三馬の生活の理解のたすけに、日本橋本町三馬店の図等を載せた。年表は、三馬の生活歴と創作歴とが一覧できることを目的とした。金銭・物価等対照索引は、庶民の暮しの中での三貨の価値を知る一助とした。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

浮世床　四十八癖

浮世床

一　酒好きの三馬の戯号の一つ。
二　「尺も短き所あり寸も長き所あり」（『楚辞』）による。一五頁＊参照。
三　中国清朝の理髪店。
四　頭の周囲を剃り、残した髪を編んで後ろへ垂らした清人の髪型。弁髪。江戸期の子供の髪型にもいう。「毛唐人」は清人を指す。
五　油をつけず、たばを出し刷毛先を散らしてまげを上へ向ける結い方。「山の神」とも。
六　隣の物はよく見えて。「糂粐」は糠味噌。
七　何の役にも立たない意の諺。
八　「白髪三千丈愁に縁つて箇の似く長し」（『唐詩選』）。「広い」は「愁」と語呂合せ。
九　国語による漢文などの解釈、解説。
一〇　中国古代の伝説的人物で、眉の間一尺、面三尺の巨人。『太平記』巻十三に見える。
一一　孔門十哲の一。「唐詩選に白髪三千丈とあるは…（略）ハテ論語にも鬢四間といふ人がある」（小松百亀『聞上手』大国）。
一二　応神天皇に召されたが、皇子大鷦鷯尊（仁徳天皇）に賜った、日向国の諸県君の娘。
一三　天明期の俗謡「新保広大寺」の替え歌「越後口説」に登場する女。歌詞の「（和尚が）お市毛饅頭で気がそれた」により、「髪長媛」のイメージを卑俗化した。「金山」は、佐渡金山と「髪」（前が高い岡）をふまえるか。

柳髪新話自序

一　醉夢閣

尺も短く、寸も長きあるは、各物によりて用る利あればなり。唐山の剃頭店、日本の髪結床、和漢唱のかはるのみにて、人情すべて同じけれど、世につれ変る髪型の流行世とおし移る髪の風。芥子坊主の毛が薄くて、雅だと喜ぶ毛唐人、媽媽梳の毛が厚くて、俗だと否がる日本人、おもひ〳〵の和漢の学問。過日も或儒先生、隣の糂粐の唐鼠屑に、大清中華と誉るの余り、いらざる隣の貨を算て、他の国の大きい自慢、唐詩の白髪三千丈、広いに縁て個の如く、髪髪までが長いであると、見て来た様なる国字解。いかに人まで大きくいふとて、大体程もあるべきに、額の亘が一尺で眉間尺と呼ぶならば、鬢が四間で閔子騫歟と訊問たれば、先生これには黙して止ぬ。其傍に国学者の在けるが、彼髪長媛から引出して、我大御国の古事来歴、お市が髪髪金山を七巻ばかりひんまいたる、童謡をさへ考訂て謂ふ歟と思ひの外、聴耳

一　使いようがあるからだ
二　呼び方が異なるだけで
三　事柄次第で
四　粋と
五　無益な
六　幅が
七　限度があるべきなのに
八　長いあるよと
九　国土が
一〇　あきれて
一一　無益な
一二　お市が髪髪金山

一 国学でいう「言挙げせぬ国（言葉に出して言い立てない国）」をふまえた。国学者による古学復興は、文化期に至り庶民の間に一種の流行をもたらすまでに盛行した。前作『浮世風呂』（文化六～十年）にも、万葉まがいの和歌を披露する「本居信仰」の女たちが登場する。

二 髪結の隠語。この本の書かれた文化八年の未年にも言い懸けた。

三 毎日、髪を結わせること。

四 一月幾らの契約で髪を結わせる。留髪。

五 「その時義経少しも騒がず」（謡曲「船弁慶」）による。

六 髪を結うには、梳き油をつけて梳き櫛で垢を取り去り、鬢付油で固める。

七 盃・箸・皿などを使っていろいろな形をつくる酒席の遊びの口上に擬した。

八 「孔」は穴開き銭、一文を指す。

九 諺「十人十色」、「十人寄れば十心」。

一〇 歌舞伎役者の髪の結い方の一。鬢をかぶるのに便利なように、鬢を低くとる。

一一 本多髷（中剃りを耳のあたりまで剃り、髪の根を引きあげて結う）に結って、髷を左または右に斜めにする。

一二 各種の人物の特徴、また、その世間話に。「情譚」を「冗談」にも懸ける。

を聾て居たるは、流石に雄々しき日本心、吾皇国の国風とはしられたり。されど、これにも考たがる癖ありて、国学大人、示ていへらく、「かみゐどん」とは髪結殿の訛れるにて、これをしも「ひつじ」と呼るを、羊のか紙を好くの語呂合せでみをすくといふより、称へ来るとおぼえたるは、例の漢籍に泥る説歟。今按ずるに、ひは日なり、日髪に結ふに拠る物ぞ。つは月の下略、是は月究に留置く故なり。偖又、じとは是如何。其時、先生些も騒がず。チト仮字は違へども、日髪月究の客多くて、朝から晩まで立続けに結て居る故、痔の無い者も痔持になる。これに仍てひつぢなるべし。又一説に、業のしの字といへり。油だらけになるを想へば、穢れるは是濁る也。其濁りをビヨイと打て、じの字なんぞはどでごんす、と意味深長なるお考へ。御壱人前三十二孔、各一癖ある所が、浮世の人情浮世床。百人会れば百種なる髪の形と人の風。楽屋銀杏の長きあり、蓮懸本田の短きあり。尺も短く、寸も長し。各其利に由て用ある所を、一個待つ間の撥子にて、おもひついたる趣向の一端。人の長短情譚に、通音をとりて咲すは、御存の戯作者

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo